YOKOHAMA HISTORY MUSEUM NEWS

横浜市歴史博物館

NEWS 33
2012・9

◇特別展「畠山重忠―横浜・二俣川に散った武蔵武士―」によせて
◇夏休み関連報告「夏休みはくぶつかん大作戦」
◇研究余話「鶴岡八幡宮関係資料にみる中世の横浜」
◇〈収集・収蔵資料の紹介〉―銭湯「港栄館」の道具―
◇〈博物館の仕事〉学芸員実習について
◇〈知ってますか?〉「ツイッターの運用開始」

●松浪小学校(茅ヶ崎市)の生徒のスケッチから

特別展「畠山重忠―横浜・二俣川に散った武蔵武士―」によせて

梧斎年英筆　英雄三十六歌撰 畠山重忠　（馬の博物館蔵）

元久二年（一二〇五）六月、横浜市旭区の二俣川において、わずか一三〇騎程度の畠山重忠は、北条氏の大軍に攻められ、壮絶な最期を遂げました。畠山重忠は、人格・体力・容姿ともにすぐれた武士として、平安時代末から鎌倉時代はじめの武蔵武士・関東武士の代表格とみられてきました。

重忠は、武蔵国で大きな勢力を誇った秩父平氏の一族で、長寛二年（一一六四）、畠山館（埼玉県深谷市）で誕生しました。治承・寿永の合戦（源平合戦）では、はじめ平家方につき三浦氏を攻めますが、やがて源頼朝に従い、宇治川の戦い・一の谷の合戦・屋島の戦いなどで活躍します。宇治川の合戦では、溺れかけてしがみついてきた烏帽子子（元服の時、冠を授けた子）の大串重親を岸に放り投げたという話をはじめ、数々のエピソードが伝えられています。

なかでも著名であるのは、一の谷の合戦で源義経が「鵯越えの逆落とし」を決行した際、重忠は愛馬三日月を背負って断崖を下りたという逸話です。しかし、この話は、重忠が非常に力持ちであったことと心根が優しいことを語るために後に作られた話であったとみられます。

文治五年（一一八九）の奥州合戦では、重忠は先陣を努め、藤原氏が阿津賀志山（福島県）に作った堀を、工夫を使って埋めるという大きな働きをしました。鎌倉幕府に仕えた重忠は、頼朝の右腕として手腕を発揮しましたが、因人扱いを受けたり、謀反の嫌疑をかけられたりすることもありました。しかし、常に誠実で、清廉潔白な態度を貫いたことが知られます。また、義経に愛された静御前が、鶴岡八幡宮で舞を舞った際、重忠は銅拍子を打っています。今様にも通じていたようです。重忠は、武勇だけではなく、幅広い教養を身につけていた武士であったのです。

後世になると、文芸作品では、重忠は誠実で、教養を備えた武士の鑑として描かれ、歌舞伎などでは情に深い脇役として登場することになります。

展覧会では、歴史資料や伝承をふまえて畠山重忠の生涯と人物像をたどるとともに、後世において畠山重忠がどのように描かれていったのかもみていきます。

ところで畠山重忠といえば、武蔵御嶽神社（東京都青梅市）には、彼が奉納したとされる赤糸威鎧（国宝）や太刀宝寿丸（重要文化財）が伝えられています。この赤糸威鎧は、鎌倉時代初期の大鎧を代表するものです。大鎧は、騎兵用の非常に重厚であるとともに、極めて華やかな鎧です。大鎧は、兜・胴・草摺・脇楯・左右の大袖・梅檀板・鳩尾板などから構成されていますが、その主な部分は、札という革や鉄で作った小片を横に綴じて札板を作り、それを縦につないで（威して）作られています。威しには、華やかな組糸などが使用されます。

復元模造　赤糸威鎧　（青梅市郷土博物館蔵）

展覧会では、畠山重忠が奉納した赤糸威鎧に代表され、武士の装いの象徴ともいえる大鎧が、どのような構造で成り立っているのか、現在の甲冑制作者の作品を交えて紹介します。また、太刀や弓矢、馬具など武士の装いに不可欠な品々、武士たちが居住した館の姿や生産活動の一端も展観します。

この特別展では、様々な視角から、武蔵武士の鑑とされた畠山重忠と彼を取りまく諸相に迫っていきたいと思います。（平野卓治）

展覧会会期
平成二四年一〇月一三日（土）～一一月二五日（日）
休館日：月曜日

夏休み関連報告

「夏休みはくぶつかん大作戦―自由研究のタネを探せ―」

博物館では、自由研究や宿題に役立つさまざまな行事を七月下旬から八月下旬にかけての夏休み期間中、集中的に実施しました。これを「夏休みはくぶつかん大作戦―自由研究のタネを探せ―」と名付け、チラシを作り、PRを行いました。

大作戦のひとつは体験学習です。普段は週末に行っている体験学習ですが、夏休み期間中は毎週火・水曜日の平日に設定しました。博物館の体験学習は、単なる工作教室ではありません。かつて利用されていたモノや技術の意味や役割を勉強し、そしてモノづくりに挑戦します。この夏は六種類のメニューを用意しました。縄文人の考え方を知るきっかけになる「仮面づくり」、古代の限られた人が持つことができた「勾玉づくり」、横浜の漁師が大漁祝いのときに着た万祝とその染めの技法を学ぶ「万祝染め」、縄文時代にも作られていた網代編みの技術を用いる「縄文ポシェット」、有用植物である竹でつくる「風車」、養蚕や桑について学ぶ「繭細工」です。いにしえの人々の知恵や工夫を学び、そして作品が残る体験学習は、子どもから大人まで興味を持って楽しんでもらえる内容と考えています。

万祝染めの体験学習では、万祝に使われる着物の柄を染めていきます。

探検隊の参加者は、金庫のような扉を持つ収蔵庫の説明に興味津々といった様子です。

横浜市歴史博物館は、横浜のさまざまな歴史にかかわる資料を集め、調べ、紹介するとともに、その資料を後世に伝えるという役割を担っています。八月の日曜日、計四日間実施した「博物館たんけん隊」は、この博物館の仕事をテーマにしたガイドツアーです。常設展示室や企画展示室で解説を受け、その後は普段立ち入ることのできない搬入口やバックヤードを見学しながら、資料の収集保存や調査研究といった表には出にくい博物館の仕事を説明します。どうして博物館の展示室は暗いのか、どうやって資料を虫やカビから守るのかなど、参加者の疑問に答えながら、博物館独特の設備や工夫も勉強します。調査で使う赤外線カメラは、肉眼では見えない墨書を見ることができ、多くの参加者が注目していました。展示室の裏側では、資料を整理したり、写真を撮影したりといった地味な作業が行われていますが、その意味や大切さを感じていただけたのではないかと思います。

八月一八日（土）・一九日（日）には、チボリ兄弟舎による紙芝居実演を行いました。当館では昨年秋に二三五巻の街頭紙芝居の寄贈を受けました。街頭紙芝居は昭和五年（一九三〇）から昭和三〇年代くらいにかけて子どもたちをとりこにした紙芝居です。毎日決まった時間、決まった場所に舞台を積んだ自転車に乗って演じ手が現れ、子どもたちに水飴やソースせんべいなどの駄菓子を売ってから紙芝居を演じました。水飴などの売上が演じ手の収入ですから、紙芝居の面白さと子どもたちを引き込む演じ方が収入を左右します。そのため街頭紙芝居は子どもたちを引きつける荒唐無稽で波瀾万丈なものがたりで構成され、続きが気になる子どもたちは来る日も来る日も紙芝居がやってくるのを楽しみにしていたのです。チボリ兄弟舎は平成二二年（二〇一〇）の「大紙芝居展」以来、毎年夏に博物館で紙芝居を演じていますが、荒唐無稽なオリジナル紙芝居にアコーディオンや鉦と太鼓の効果音、現代の流行ネタを織り交ぜた台詞で、いつもエントランスホールを笑いの渦に巻き込んでいます。路地や空き地で人と人とが相対して演じていた街頭紙芝居と、それに熱中していた昭和時代の子どもたち。チボリ兄弟舎の紙芝居を見た方は、街頭紙芝居が演じられていた頃の空間も垣間見ることができるように思います。

ものがたりの中にクイズを組み込んだ独特な紙芝居もチボリ兄弟舎は演じていました

今年、夏休みはくぶつかん大作戦にご参加いただいた方は一一〇〇人以上を数えました。歴史に学べることは数多くあり、そのきっかけを提供することも博物館の大切な仕事です。子どもから大人まで多くの方が歴史に興味を持てるきっかけとなるような行事を今後も展開していきたいと思います。

（刈田　均）

研究余話

鶴岡八幡宮関係資料にみる中世の横浜

はじめに

鎌倉に鎮座する鶴岡八幡宮は、治承四年（一一八〇）に国家鎮護と源氏の繁栄を祈願するため、源頼朝によって建立されました。当初から明治三年に至るまで「鶴岡八幡宮寺」という寺院であり、その経営は別当を頂点とする供養法衆（供僧・僧侶）たちによって行われ、古文書をはじめとするさまざまな歴史資料がのこされています。

ここではそれら古文書と鶴岡八幡宮の関連資料をとおして、中世の横浜の一端をご紹介します。

一　横浜に関する中世古文書

鶴岡八幡宮が有する国指定重要文化財の古文書（本宮・塔頭など）は一三三点あり、[*1]そのうち七点に横浜市域の地名が登場します（表一）。

まず①は、武蔵国のうち八幡宮領の稲目・神奈河両郷にかかる役夫工米[*2]（伊勢神宮の造替費用として徴収される税金）を免除することを命じたものです。「神奈河」とは現在の横浜市神奈川区にあった神奈川湊を含む一帯を、また「稲目」とは現在の川崎市多摩区生田付近を指します。ついで⑥は「武蔵国師岡保柴関所」について、関東管領上杉氏が八幡宮領である同地を安堵しているものです。師岡保柴関所とは、現在の横浜市西区浅間町付近に当たり、ここに通行料を徴収する関所が設けられていたことが分かります。

②と⑤はともに鶴見郷（横浜市鶴見区）から八幡宮の放生会費用を納入する文書で、法会の費用が②では十貫文なのに対し⑤では十二貫文と記されています。文書の差出の「致誠」および「栄」とは、鶴見郷の百姓たちから費用分を徴収して八幡宮に納入する代官と考えられます。

⑦は、八幡宮供僧のトップである別当弘尊が、供僧の助阿闍梨に給分として武州寺尾郷のうち渋沢村の得分を付与したもので、武州寺尾郷とは現在の横浜市鶴見区の東寺尾・西寺尾一帯を指します。「社役ならびに反銭之れを除く」の記述から、助阿闍梨の得分には八幡宮の課税が免除されていたことが分かります。

③と④は武蔵国久良郡久友郷について、八幡宮の支配を安堵したものです。それぞれの差出は③が室町幕府二代将軍足利義詮、④が室町幕府管領細川頼之であり、ともに当時の権力中枢が八幡宮側の求めに応じて所領の安堵状を発給しています。武蔵国久良郡とは久良岐郡のことですが、そこに含まれたはずの久友郷については、具体的な場所は分かっていません。

先行研究に拠れば、[*3]鶴岡八幡宮の所領は一四・五世紀に関東一帯だけで約六十箇所におよび、その半数が相模国（神奈川県）に、横浜市域には約一五箇所の所領が点在していました（図一）。

二　供僧たちの供料所とそのトラブル

鶴岡八幡宮の供僧たちには、二十五坊と称された本様供僧（根本供僧）と、神宮寺や七仏薬師・千体堂など個別の堂舎の法要を担当した脇堂供僧とがあり、それぞれ法会などを修することで供料（給分）を得ていました。供僧の記録によれば、二十五坊の各坊に毎月末三十貫文もの供料が納入されることになっていたようです。[*4]

しかし実際には、供料田の代官や地頭を務める武士と供僧との間で、納入をめぐるトラブルが頻発していました。たとえば鎌倉時代の文永七年（一二七〇）閏九月十日の資料[*5]には、二十五坊の一つ相承院の相伝する相模国岡津郷（横浜市戸塚区）の供料田八町八段について、供僧幸猷が源頼朝によって寄進されて以来相伝していると主張するのに対し、地頭甲斐為成は供料田の存在を認めずに、両者が争ったことが記されています。結果として鎌倉幕府は地頭甲斐氏に対し、地頭として毎年十五石の供料を供僧へ納めるよう命じています。また正

表１　鶴岡八幡宮文書にふくまれる横浜関係文書

No.	文書名	元号	西暦	月日	出てくる横浜の地名
①	北条時宗下文	文永３年	1266	５月２日	神奈河
②	鶴岡八幡宮放生会用途送進状	延文３年	1358	８月14日	武蔵国鶴見郷
③	将軍家足利義詮御内書	貞治４年	1365	７月22日	武蔵国久良郡久友郷
④	室町幕府管領細川頼之奉書	応安６年	1373	４月24日	武蔵国久良郡久友郷
⑤	武蔵国鶴見郷代官栄神事料足検納状	永和３年	1377	８月13日	武蔵国鶴見郷（大山郷）
⑥	関東管領家上杉清方奉行人連署奉書	嘉吉元年	1441	12月26日	武蔵国師岡保柴関所
⑦	別当弘尊宛行状	文安４年	1447	閏２月28日	武州寺尾郷渋沢村

安元年（一二九九）十月二十七日の資料[*6]には、供僧承成と相模国飯田郷（横浜市泉区）の地頭が、供料を量る収納枡について相論し、供料の減少を地頭による収納枡の作り替えが原因だと訴える供僧に対して、地頭は枡に供僧の判があるためそのようなことは無いと主張しています。両者は更に供料を納入する場所についても対立し、結局鎌倉幕府は、供料は八幡宮の枡で量ること、供料の納入場所を地頭の館とし、供僧の使者が取りに来て地頭側が量って渡すことを命じています。

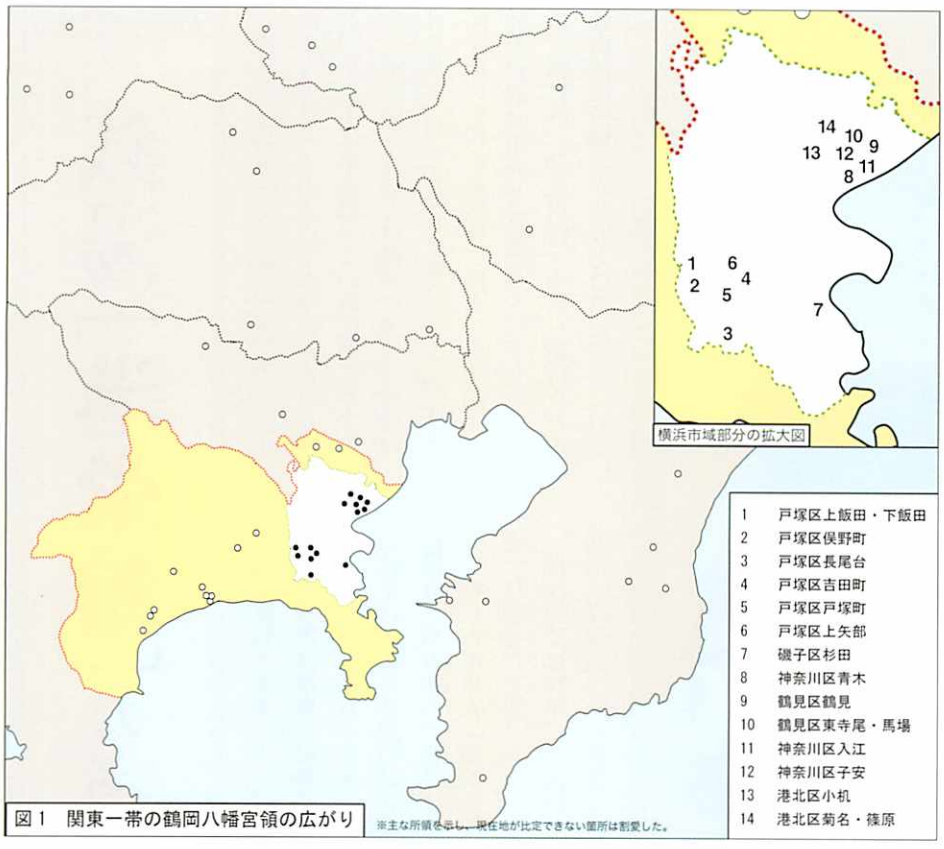


図1　関東一帯の鶴岡八幡宮領の広がり

三　郷への「強入部」・供餅の「不参」

先にみた資料の続きには「壇供餅ならびに御節供等の事、（中略）而して承成則ち、壇供ならびに節供を地頭対捍すの由之れを申す、地頭また未進無きの旨之れを陳ず、てへれば早く結解を遂げ、未進有らば究済せしむべし」とあり、八幡宮供僧は、飯田郷の地頭が郷に賦課される壇供餅および節供をも未進していると訴えています。

八幡宮の正月修正会と季節ごとの節供会には、八幡宮の所領から供餅が上納されていました。室町時代の供僧の記録には「御壇供に大小納める諸郷名、小餅は大ニソエテ納むもの也」や「上宮分御壇供、輪形寸形之れ在り」とあり、餅には大きさの違いや輪形（鏡餅）・寸形（四角い餅）などの形の違いがあったようです。そしてこれら供餅を上納する郷々については、

大

一矢部郷、五十五枚納、長尾郷六十枚納、村岡郷十枚納、村岡郷ノ百姓ニ相尋處ニ、大一二小餅一宛ソヘ申之也、

合大百廿五枚納、

小

染津郷、百枚納、坂間郷五十枚納、□木郷廿枚納、飯田郷五十枚強入部不参、亦野郷十枚納強入部不参、

合小二百卅枚納之、

一高塚郷、七十枚納、村岡郷三十五枚納、弘川郷三十枚納、

合大百二十五枚納之、

小

桑原郷六十枚納、寺尾郷卅枚納強入部不参、入江郷十五枚納強入部不参、子若郷六十枚納是ニハ五十餘年不参也、

合小百六十五枚納之、

とあり、これを見ると大の餅は矢部郷・長尾郷・村岡郷から百二十五枚、高塚郷・村岡郷・弘川郷から百三十五枚、小の餅は染津郷・坂間郷・□木郷・飯田郷・俣野郷から二百三十枚と、桑原郷・寺尾郷・入江郷・子安郷から百六十五枚とそれぞれ納められており、このうち飯田郷・俣野郷・寺尾郷・入江郷・子安郷が横浜市域に該当します。[*7]

ところで、これら市域の郷々には「強入部不参」「是ニハ五十餘年不参也」（傍線部）とも記されています。この「強入部」とは他勢力の武力進入を示す言葉で、この当時、市域の郷々には八幡宮以外の勢力が伸張し、実際には供物の餅が上納されない「不参」の状態が長く続いていた事が分かります。

おわりに

関東一帯に点在する八幡宮領では、鎌倉期以降に各郷の地頭や代官が勢力を伸張したため、法会料や供料の納入は滞り、室町期の動乱はそれら他者の勢力をますます活発化させていきました。鶴岡八幡宮古文書および関連資料からは横浜市域の郷々もまた、それら勢力の侵攻にさらされていた様子が読みとれます。

（阿諏訪青美）

*1 文書点数および文書名は『鶴岡叢書第三輯　鮮明鶴岡八幡宮古文書集』（鶴岡八幡宮、一九八〇年）の表記に従った。

*2 「やくぶたくまい」とも読まれる。

*3 山田邦明『鎌倉府と関東』（校倉書房、一九九五年）。

*4 「香蔵院珎祐記録」冒頭（『神道大系鶴岡』財団法人神道大系編纂会、一九七九年）。

*5 「関東下知状」相承院文書二一八（『鎌倉市史史料編一』鎌倉市、一九五八年）。

*6 「関東下知状」我覚院文書一六五（『鎌倉市史史料編一』鎌倉市、一九五八年）。

*7 「香蔵院珎祐記録」長禄四年（一四六〇）正月五日条。

銭湯「港栄館」の道具

皆さんは銭湯に行ったことがありますか？今ではどこの家にもお風呂がありますが、かつては家風呂がない時代がありました。その頃、人びとは銭湯に通って労働の汗を流し、日々の疲れを癒していたのです。昭和四〇年代の最盛期、四七〇軒を超える銭湯が横浜市内で営業していました。特に、鶴見区・神奈川区・中区・南区などの臨海部や労働者が集うところに多く、日本の高度成長を支えた人々やその家族の衛生面で、銭湯は重要な役割を果たしていました。しかしその後、家風呂の増加や入浴料の値上げによる客足の鈍化から軒数は急速に減り、現在市内で営業するのはわずかに九三軒（吉田律人「横浜銭湯の大正・昭和史」による）です。

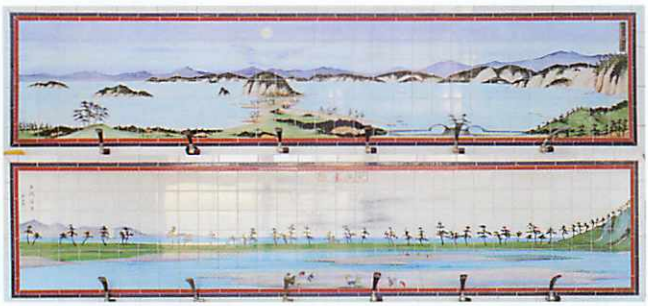
寄贈された資料の一部です。おなじみの黄色い桶にタオル、ロッカーやドライヤーなどの大きなもの、暖簾やのぼり旗などさまざまな資料があります。

博物館では昨年、金沢区で営業していた銭湯「港栄館」から数多くの道具を寄贈していただきました。昨年九月に惜しまれつつ五八年の歴史に幕を下ろした同館は、昭和二七年の創業で近隣の多くの人々に利用されていました。

営業されていた時の港栄館です。古い大きな瓦屋根と、後に改装された際のオレンジ色の瓦が組み合わさり、建物の特徴になっています。

おなじみの黄色い風呂桶やイス、手ぬぐいやバスタオルなどの小さなものから、脱衣場の貸ロッカーやベビーベッド、さらにはお釜型のドライヤーにお店の電飾看板まで、明日から銭湯が営業できそうなほど豊富な内容の資料群です。

その港栄館で、お客さんに長年にわたって親しまれたものに洗い場のタイル絵があります。歌川広重の「武陽金沢八勝夜景」と「平潟落雁」、横浜・金沢を代表するふたつの浮世絵があしらわれたタイル絵は、男湯と女湯の境の壁面にそれぞれ設置されていました。耐水性を考慮して強固に貼られた浴室のタイルは、すべてを剥がすことはできませんでしたが、剥ぎ取った一部は道具とともに資料として寄贈していただきました。


タイル絵　上「武陽金沢八勝夜景」（男湯）、下「平潟落雁」（女湯）

「なぜ横浜に銭湯の道具が必要なのか？」こう疑問に思う方もいらっしゃるでしょう。実は、横浜や東京には、新潟や北陸地方出身の方が始められた銭湯が数多くみられます。港栄館の先代も新潟県出身の方ですが、これがひとつの答えです。他地域出身の人々がどのように横浜という都市で生活の基盤を築いたのか。どういった地域から集まった人によって街が形成されていったのか。寄贈いただいた資料から、こうした点を明らかにすることが期待できます。

昭和三〇年代が社会的なブームとなっている近年、同時代の生活や文化をテーマとした展覧会が各地で開催され、それに伴って銭湯が紹介される機会も増えています。そこへ横浜という地域を重ね合わせてみると、全国から集まった労働者とその家族の公衆衛生を守った新潟・北陸地方出身者による銭湯という存在が見えてくるのです。

（羽毛田智幸）

〈博物館の仕事〉学芸員実習について

博物館実習は、文部科学省で定められた学芸員資格取得に必要な博物館に関する科目の一つです。博物館法の施行規則は、学生が博物館施設で実務にあたりながら習得することを定めています。実習期間は特に定められていませんが、多くの施設は一週間から一〇日程度で設定しているようです。

当館の実習は、五月から一一月にかけて月に一・二回ずつ合計九日間で行うAコース、八月のほぼまとまった時期に合計八日間行うBコースの二コースを設けています。どちらのコースも一日はガイダンスです。午前中は博物館施設や設備の見学、午後は展示・調査研究・教育普及・事務など博物館の具体的な業務についての説明、その後当館に隣接した大塚・歳勝土遺跡公園の見学を行っています。

実習では民俗資料に向き合いながら、カードにデータを記入します。(平成24年8月)

実習期間のうち二日間は、資料整理と写真器材の取り扱いを学びます。資料整理では、実際に資料に触れながら資料カードに大きさや破損状況、読み取れる墨書などのデータを書き込み、スケッチを描きます。写真器材の取り扱いでは、背景紙の前に資料を置き、ライティングを行ってデジタルカメラで資料を撮影します。どんなに資料保存の技術が進歩しようとも、経年劣化は避けることができません。スケッチやデータ、そして写真という画像で記録して、資料の現状を後世に伝えることができるのです。学生には正確に、そして丁寧に、後世の人たちでもわかるように、データを記入することを求めています。

当館では勾玉づくりや土偶づくりなどの体験学習に三日をあてています。実習で経験できる体験学習のメニューはコースによって異なりますが、一日は自ら体験することと指導補助、一日は別メニューの体験と指導案作り、もう一日は実際に参加者への指導を行います。当館の体験学習は小学生から大人まで幅広い年齢層の参加者があり、説明や作業は全て一斉指導で進めています。学生は、モノや技術の意味や役割、また作業の手順を子どもたちにも理解できる平易な言葉で分かりやすく正確に伝え、しかも全ての作業を二時間三〇分以内に終了しなければなりません。大勢の前で話をした経験もないままいきなり三〇人前後の参加者を前に指導をするので、緊張で早口になったり、声が小さくなったりする学生を毎年見かけます。

体験学習参加者の前で緊張しながら土偶の説明をする実習生（平成23年10月）

そして一日は遺跡公園を活用して行う「野焼き」です。体験学習で作った土偶などを縄文時代と同じような方法で焼き上げるのです。ブロックや薪を運んだり、鉈を使って木っ端を作ったりといった力仕事もあれば、火を絶やさないよう薪をくべたり、木っ端を燃やしながら土器でスープを作ったりという、熱さで危険が伴う作業もあります。体力が必要であることを実感しながら、経験したことのない作業を学生はこなしていきます。

実習の最終日には討論会です。実習期間中に課したレポートに基づいてそれぞれが発表し、当館職員を交えて意見を交換しながら話を深めていきます。職員は学生の意見を知る良い機会であり、また学生はいろいろな意見があることに刺激を受けているようです。このほかAコースでは夏期に行う集客事業の補助も一日行います。今年度はAコース八名、Bコースは一二名の実習生を受け入れました。

現在学芸員資格を取得できる大学や短大は全国に二九七校あり、毎年相当数の学生が博物館実習を経験し、学芸員資格を取得して卒業しています。けれども学芸員の募集はきわめて少なく、現実に博物館で学芸員として働くことは非常に困難な状況です。

八～九日という長いようで短い実習ですが、学生はいろいろなことを初めて経験します。子どもたちから笑顔でかけられた「ありがとう」という言葉、一生懸命描いたけれど未熟なスケッチ、野焼きでの炎の熱さなど、学生の実習日誌には初めての経験に対する感動や驚き、また反省の言葉が綴られていて、豊かな感性を持ちつつ真剣に取り組んでいることがうかがえます。たとえ学芸員になれなくても、実習で得た経験を何か少しでも将来に活かしてもらえればと願っています。

（刈田　均）

表紙のスケッチ一覧

ブース	資料名
古代	革帯　（位をもった人が着用した帯　復元）
中世	平子重経（沙弥西仁）坐像　（山口市源久寺蔵　複製）
中世	銭貨　宋（中国）
古代	鳥形埴輪　（戸塚区　上矢部町富士山古墳出土埴輪）
古代	木簡　（官人の七つ道具）
原始Ⅰ	遺体の頭に被せられていた土器　（都筑区　月出松遺跡）
古代	管玉
近現代	防空用電燈遮光笠
原始Ⅱ	敲石　（石器作り用ハンマー：　青葉区　観福寺北遺跡）
近世	大山講御神酒枠
古代	鼉龍鏡　（港北区　日吉矢上古墳　復元）
近現代	衣料切符
古代	馬形埴輪　（戸塚区　上矢部町富士山古墳出土埴輪）
古代	硯（円面硯）　（官人の七つ道具）
古代	カマドの支脚　（都筑区　矢崎山遺跡）
原始Ⅰ	けつ状耳飾り　（都筑区　西ノ谷貝塚）
原始Ⅰ	注口土器　（都筑区　原出口遺跡）
原始Ⅰ	溝の中に転落していた土器　（都筑区　権田原遺跡）
原始Ⅱ	縄文土器
近世	庚申塔　（港北区中里講中蔵　複製）

横浜市歴史博物館●日誌●

二〇一二年四月一日～二〇一二年九月三〇日

- 4月1日　体験学習室ミニ展示「私たちが作った縄文土器展」(4月5日まで)
- 4月7日　企画展「海にこぎ出せ!弥生人」開催(5月27日まで)
- 4月14日　企画展関連研究講座「弥生時代の漁具」
- 4月14・15日　体験学習「小さな弥生土器」
- 4月22日　企画展関連フロアレクチャー
- 4月25日　ふるさと横浜探検「よこはま事始め 災害から振り返る横浜の歴史(関内・関外地区)」
- 4月28日　ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【原始I】」「火起こし体験」
- 4月29日　企画展関連講演会「貝の考古学」
  企画展関連ゴールデンウィーク親子イベント「貝輪(かいわ)を作ろう」
- 4月30日　企画展関連フロアレクチャー
- 5月3～5日　企画展関連ゴールデンウィーク親子イベント　親子向けフロアレクチャー(やさしい展示解説)
- 5月3・4日　企画展関連ゴールデンウィーク親子イベント　勾玉ワークショップ
- 5月5日　企画展関連ゴールデンウィーク親子イベント　子どもの日スペシャル大塚遺跡まつり
  体験学習「小さな弥生土器」野焼き
- 5月12日　企画展関連研究講座「弥生人と貝塚」
- 5月20日　民俗学講演会「養蚕起源説話から見る女性と養蚕」
- 5月20日　企画展関連フロアレクチャー
- 5月23日　企画展関連遺跡見学バスツアー ふるさと横浜探検「三浦半島の遺跡と資料館を訪ねて」
- 5月26日　ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【原始II】」「火起こし体験」
- 6月9日　収蔵資料展「相模国鎌倉郡鍛冶ヶ谷村と小岩井家」開催(7月8日まで)
- 6月10日　収蔵資料展関連フロアレクチャー
- 6月16日　収蔵資料展関連フロアレクチャー
- 6月16・17日　体験学習「小田原提灯(ちょうちん)」
- 6月17日　収蔵資料展関連研究講座「鍛冶ヶ谷村と小岩井六郎兵衛」
- 6月23日　収蔵資料展関連フロアレクチャー
- 6月24日　収蔵資料展関連研究講座「戸塚宿助郷と海防関連の役負担」
- 6月30日　ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【古代】」「火起こし体験」
- 7月1日　収蔵資料展関連研究講座「御用留にみるペリー来航と横浜開港」
  収蔵資料展関連フロアレクチャー
- 7月7日　収蔵資料ミニ展示「汽車土瓶ー旅のおともにお茶はいかが?ー」(7月16日まで)
  収蔵資料展関連フロアレクチャー
- 7月8日　収蔵資料展関連研究講座「寺社・信仰とのかかわり」
  収蔵資料展関連フロアレクチャー
- 7月13日　体験学習室ミニ展示「江戸の旅・明治の旅」(10月2日まで)
- 7月14日　第22回エントランスホールコンサート「ヴァイオリンとギターの艶やかな響き」
- 7月16日　収蔵資料ミニ展示解説
- 7月24日　体験学習「勾玉(まがたま)」
- 7月25日　体験学習「竹の風車(かざぐるま)」
- 7月28日　企画展「生麦事件と横浜の村々」開催(9月23日まで)
  ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【中世】」「火起こし体験」
- 7月29日　復活!街頭紙芝居
- 7月31日・8月1日　体験学習「染めもの(万祝染)」
- 8月4日　企画展関連フロアレクチャー
- 8月5日　夏休み博物館たんけん隊(学芸員と企画展を楽しもう)
- 8月7・8日　体験学習「縄文時代の仮面」
- 8月11日　収蔵資料ミニ展示「典籍資料にみる古代武蔵の牧と駒牽」(8月19日まで)
  企画展関連フロアレクチャー
- 8月12日　夏休み博物館たんけん隊(学芸員と企画展を楽しもう)
- 8月14日　体験学習「縄文ポシェット」
- 8月15日　体験学習「繭(まゆ)細工」
- 8月18・19日　街頭文化祭チボリ兄弟舎紙芝居
- 8月19日　夏休み博物館たんけん隊(学芸員と企画展を楽しもう)
  収蔵資料ミニ展示解説
- 8月21・22日　体験学習「勾玉(まがたま)」
- 8月22日　子どもアドベンチャー2012「博物館の裏側を探検しよう!」
- 8月25日　ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【近世】」
  体験学習「縄文時代の仮面」野焼き
- 8月26日　夏休み博物館たんけん隊(学芸員と企画展を楽しもう)
- 9月1日　企画展関連研究講座「相州浦賀湊の浪士取締と海防体制ー生麦事件前後ー」
- 9月2日　企画展関連フロアレクチャー
- 9月8日　収蔵資料ミニ展示「藪根不動原遺跡出土資料」(9月17日まで)
- 9月8日　企画展関連研究講座「幕末江戸の外国人」
- 9月9日　企画展関連講演会「生麦事件からみる幕末の日本と世界」
- 9月15～16日　竪穴住居に泊まろう!
- 9月15日　企画展関連研究講座「幕臣小野友五郎の江戸湾海防構想とその展開ー生麦事件の余波と文久の防備強化ー」
- 9月17日　企画展関連フロアレクチャー
- 9月17日　収蔵資料ミニ展示解説
- 9月21日　ふるさと横浜探検「緑区恩田川流域の田んぼと新治の里山を訪ねて」
- 9月22日　企画展関連研究講座「生麦事件と横浜の村々ー村々に残された記録から」
- 9月29日　ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【近現代】」

INFORMATION

??????? 知ってますか ???????

ツイッターの運用開始

横浜市歴史博物館では、平成２４年１月から広報手段の一つとしてツイッターの運用を始めました。

ツイッターはパソコンや携帯電話、スマートフォンなどのインターネットを使える環境があれば、どなたでも利用することができるコミュニケーションサービスです。発信する内容は、博物館でのイベントの案内や情報、お知らせなどになります。

常設展示室内の歴史劇場のコーナーで案内役をつとめている、博物館のマスコットであり、名誉学芸員でもあるレックルがつぶやきます。アカウントは @ yokorekihaku です。ぜひフォローしてくださいネ。

アイコンのレックルは時々かわります。そちらもお楽しみに！

http://twitter.com/yokorekihaku

これからの催しもの

◎特別展「畠山重忠ー横浜・二俣川に散った武蔵武士ー」
10月13日(土)～11月25日(日)

◎「武家の古都・鎌倉」世界遺産登録推進事業関連「称名寺を掘る」(仮称)

◎「横浜の遺跡展ー縄文時代中期の横浜ー」
12月8日(土)～平成25年1月14日(月・祝)

◎企画展「千歯扱きの来た道」(仮称)
平成25年1月26日(土)～3月24日(日)

表紙写真は

さて、何の絵かおわかりでしょうか。実は全て当館常設展示室にある資料です。今春、社会科見学で当館を訪れた小学生が、各自おすすめの資料をスケッチし、なぜそれを選んだかの理由を付して送ってくれました。どれもユニークな選択で、見ていて楽しくなりますね。ぜひ、常設展示室で実物と出会って下さい。資料名は7頁にあります。

編集後記

今夏は子どもの好奇心につき合い、蝉の羽化を何匹分観察したことか。おかげで新しい夏の宵の過ごし方を楽しみました。当博物館も人々の様々な興味に支えられ、日々新たな経験を重ねています。「この博物館は生き生きしている」と感じてもらえるような館であり続けたい、と蟋蟀の声を耳にし思う良夜。(f)

横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

●開館時間

午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)
大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン

●休館日

歴史博物館・大塚遺跡
月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料

区　分	個　人	団　体 (20人以上,1人につき)
一　般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。
◆毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。
◆「濱ともカード」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図　横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
(「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分)

駐車場あり(1時間200円)

●インターネットホームページ　http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/

横浜市歴史博物館ニュースNo.33／2012年9月30日発行
●編集・発行　横浜市歴史博物館
●印刷　株式会社神奈川新聞社クロスメディア営業局

横浜市歴史博物館
〒224-0003　横浜市都筑区中川中央 1-18-1
TEL.045-912-7777(代表)　FAX.045-912-7781